リアルを目指した模造に愛着する。超現実な夢。

糸販売のためのツールだった細かく仕切られた木製ボックス。この店ではロット入れに使用。

めちゃめちゃかわいい鳥と鳥かご付き時計。セイコーのもの。時間になると鳥がさえずる。針の形や文字盤のデザインなどディティールがいちいちかわいい。

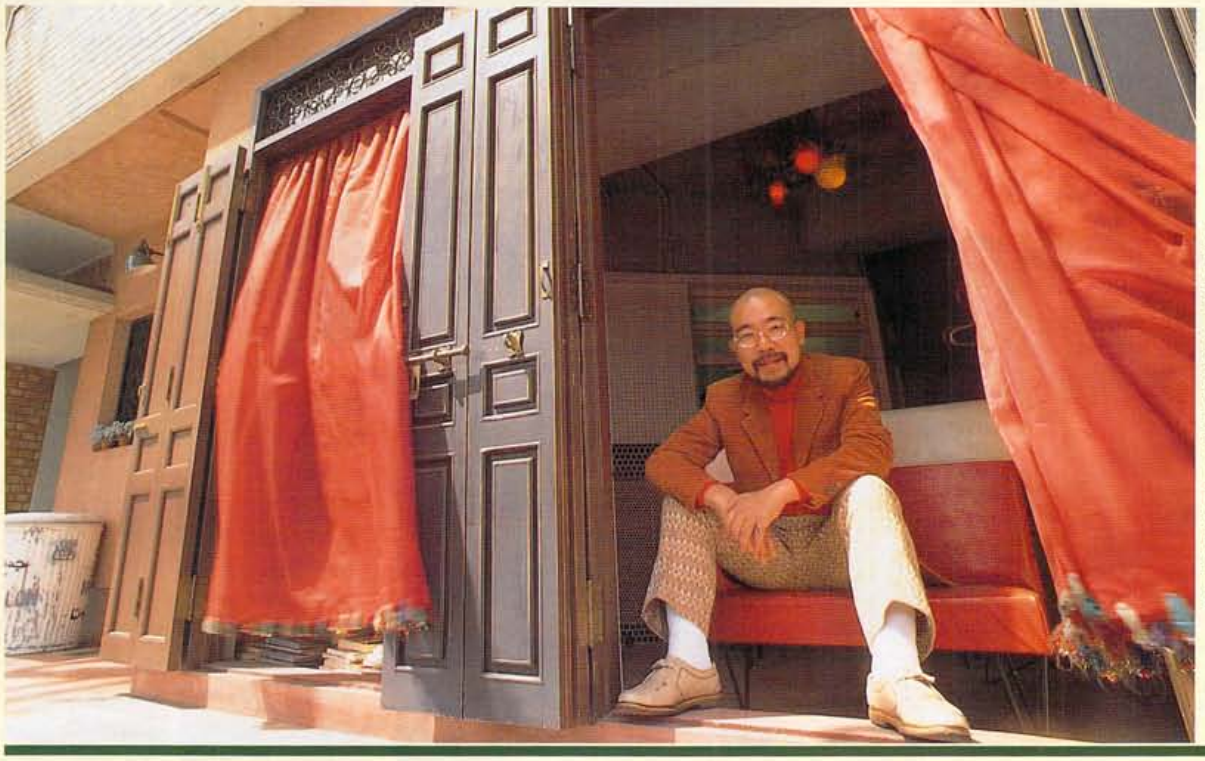
作り手の創意を愛しむ。リアルからはなれたモノの「ええとこ」を見る。

この店の壁に使われているコンクリートは小学校の廊下を思い出させる。それは石片などを混ぜて淡い緑に着色されたそれ自体「そういう石」に見えるように加工されたものだ。「ほんまもんじゃないけどよりほんまもんに見えるように、こうしたら石に見えるんちゃうかな、ていう作った人の創意があるところが好きなんです。」

ビューティ・ヘアサロンの片山氏のモノへの執着の起点はすべてこの言葉に集約されてしまっている。「本物みたいに作ろうとしてるんやけど、作られたモノは『こんな感じかな』ていうその人が思い描いた、想像のモノ、なんやね。」片山氏はそこに強い愛着を感じという。「ほらセルロイドに見えるように作ってはんねん。」一見何でもないプラスチックのクシが片山氏の手の中で「愛らしい」モノに変身していく。「人でもモノでもええとこ見てあげないと（笑）」独特の愛しみ方は、忘れられかけたモノの声をしっかり聞き取れるやさしさに満ちている。

PROFILE

ビューティ・ヘアサロンの片山孝和さん。60年代後半のシルエットが好きというデッドストックのジャケットと商店街で買ったセーター。シンプルさが気持ちにあって5～6年前からヘアはスキンヘッド。



自分のことをよくある「昭和マニア」と思われるのは心外だという。「可愛らしな、と思うものが、うん、好きなだけで、たいそうすぎひんものね。忘れてるけどあれ良かったんちゃう？いうものね。」こだわりがあるだけに何に対してもウルサイ方であった片山氏ではあるが、数年くらい前から「シンプルになってきた」という。「お客さんに何か相談されても前は「うーん」て聞いてたけど、この頃は「（そんな姿より）もっとええとこ見せてよ」て言う。ジョン・ウォーターズの映画などにこだわりまくったこともあったが、今は「柔らかなった」片山氏。「人が好きなんやね。人との出会いを大事にしていきたい」という。

お魚のルアー、なのだがライターケースにもなる。「可愛らしでしょう。」

手作りミニ水族館。入っている金魚は手塗りのもの。「内職で作ったようなところが好きですね。」

特注の箱に入れてもらっている日本製の人体。グロ好きなわけではない。だが人体はけっこう好き。日本製はやはり品がいいという。「それに繊細。」

磁石で付く鳥入り鳥かご。「鳥好きなんですけど、飼ったら死ぬでしょう。」「どういうところが好きなんですか？」「夢があるでしょう？」

富士山シリーズのお香入れと皿。持ってるだけではなく使う主義である。

ケバケバしい左のランプは「昔のラブホテルに置いてあったと思う。」並んであるのはホンコンフラワー。左は温泉地の土産物屋でデッドストックになっていた貝のランプ。

コレクトしている海老シリーズの一枚。「取り壊されそうな家に転がってて、僕が拾ってきてあげたん（笑）です。」

取材・文／端井由紀子★写真／武藤育子